

この国に 生まれてよかった この時代に 生きてよかった

早いものです。本連載は先月号から後半に入っています。今回からは、障害分野についての大切なテーマを5つのタイトルに分けて掘り下げたいと思います。連載のメインテーマである、「この国に生まれてよかった」この時代に生きてよかった」をどうすれば実感できるのか、このことをいつもベースに置くつもりです。引き続き、読者会などでみんなといっしょに、また一人でじっくりと読んでほしいと思います。

■権利条約に文化の香り

「障害分野に関わってきて、これまで一番うれしかったことは何ですか」と尋ねられたらどうでしょう。「一番」と付けられると一瞬ためらいますが、それでもすかさずこう答えます。「障害者権利条約の誕生です」と。それほど障害者権利条約（以下、権利条約）はかけがえのないものです。いとおしく、時に抱きしめたいような心境にかられます。言い方を変えると、質のいい文化に接し



第8回 抱きしめたい障害者権利条約

藤井克徳

日本障害者協会代表・きょうされん専務理事

ふじい かつのり / 1949年生まれ。養護学校教員をへて、日本初の精神障害者のための共同作業所「あさやけ第2作業所」や「きょうされん」の活動に専念。日本障害フォーラム（JDF）や、日本障害者協会（JD）など、様々な団体の役員をつとめる。

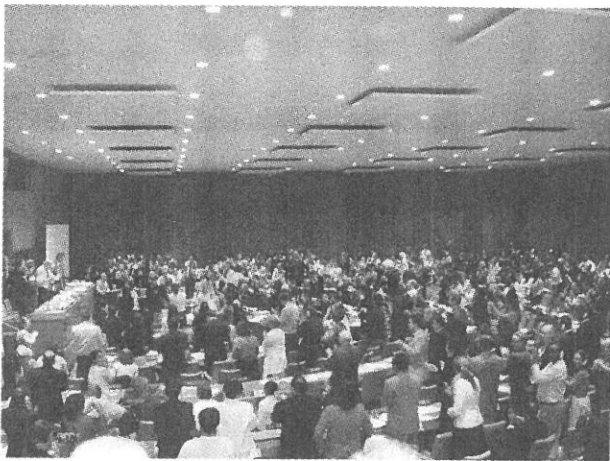
ているような感じですが。

質のいい文化とは何かということになりませんが、いくつかの要件があるはずですが。少なくとも、いつまでも飽きがないこと、大半の人が深みのある感動を覚えること、そしてその価値が時間を超越することなどかと思えます。要するに普遍性を備えていることです。権利条約は、普遍性という点で申し分ありません。まずは、地球上のいずこにあっても通用します。権利条約が最も強調している「障害のある人と無い人との平等性」は、途上国や新興国に加えて、工業先進国でも共通する今日的な課題ではないでしょうか。私たちの日本も同様で、権利条約のメッセージはピンピンと伝わってきます。

もう一つの普遍性は、時代を越えて色あせないことです。世界中で競争原理が闊歩する現代にあつて、「このままでいいのでしょうか」と警鐘を鳴らしているのも権利条約です。金銭や効率中心になってしまった社会の仕組みや基準値を、障害のある人を含む人間中心に取り戻そうと言っているのです。また、権利条約は現代への警鐘だけではありません。平和を脅かす動きや強者の論理が絶えず頭をもたげようとしているなか、これらを察知し、抑制するうえからも有効です。未来に向けてその価値が増していくように思われます。

■思わぬ発見があるはず

いかがでしょう。権利条約の大切さがわか



▲2006年8月25日の条約採択時の会場

ってもらえたのではないのでしょうか。障害当事者や家族にとってはもちろん、支援者や障害分野に携わる人にとつての必須の指南書と言つていいかと思えます。法律文や翻訳からくる難解さもあり、一見してとっつきにくいのですが、少し馴染むと「わが意を得たり」の心持ちになるはずですが。また、政策面での羅針盤だけではなく、支援にあつたつての視座やヒントも豊富に含まれています。

以下は、権利条約を深めるうえでの関連する情報で、あまり紹介されてこなかったエピソードも織り込んであります。紙幅の都合で、個々の条文には触れることができません。本稿を読み終えたあとに、ぜひ25項目の前文と50カ条の本則に直に接してほしいのです。関心がある条文のつまみ食いでも結構で

す。くり返し読み返すうちに、またいくつかの条文を併せ読むうちに、思わぬ発見や権利条約の本質に出会えるにちがいません。最初に、日本政府の権利条約への初期段階での対処について簡単にふり返っておきましょう。まず紹介したいのは、メキシコのフォックス大統領が国連総会で「障害者権利条約」を提唱した時の日本政府の反応です。提唱の演説は2001年11月9日に行なわれ、私たちに第一報が入ってきたのは、週が明けた11月12日でした。私は早速、電話で内閣府の担当参事官に問い合わせました。返ってきた答えは、「メキシコ政府のスタンドプレーですよ。あまり取り合わない方が」というものでした。さみしい気持ちになりましたが、気を取り直して政界での障害分野の第一人者を標榜していた与野党の二人の国会議員に電話を入れました。返ってきた答えは、二人とも参事官の返答と瓜二つでした。おそらく、日本政府としての統一見解がまとめられ、議員はその請け売りだったと思えます。

■日本政府の冷ややかさ

こうした姿勢は、これに続く大事な行動を鈍らせることになります。それは、権利条約を専門に審議するための特別委員会設置の共同提案国（28カ国）に加わるタイミングを逃してしまったことです。歴史的な失態と言つていいのではないのでしょうか。

もう一つあげておきましょう。特別委員会の最終局面で、イスラエルが「外国による占